
禍害妄想

M/II

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

禍害妄想

【Nコード】

N0360F

【作者名】

M川

【あらすじ】

「私がユキを殺しました」「実は、僕がユキを殺したのです」「何を隠そう、あたしがユキを殺したのよ」「まったく、どうなってやる。真実の自供をしているのは、一体誰なんだ。」

犯人の自供・1

私がユキを殺しました。はい。そうです。ユキを殺したのは私です。全部話します。何しろ、私は殺したのですから、ユキを。はい。私の単独犯行です。

ナイフを使いました。そうです。現場に残っていたそれです。ユキの胸に突き立っていたそれです。私が刺したのです。私が刺して殺したのです。

はい、そうです。殺した後で、ナイフの柄にユキの指紋をつけました。偽装です。私はそれを自殺に見せかけようとしたのです。最低です。

殺した理由は、簡単なことです。ユキは私のことを愛してくれていなかったからです。他人のものになるくらいなら、この世にないほうが良いと思ったのです。最悪です。そうです。私は最低で最悪な男です。今は、その自覚があります。生きる価値なんてないのに、慣性で転がり続けるゴムボールみたいに、ただ生きている、下らない存在です。死にたいです。死にたいのです。死刑ですか？もし、死刑にならなかったとしても、私は自殺します。でも、自殺するのは、罪を償ってからにします。

犯人の自供・2

僕がユキを殺したのです。ええ。そうですよ。ユキを殺したのは僕です。全て話しましょう。当然ですね、僕は殺したのだから、ユキを。ええ。共犯者はいません。

包丁を使っただけです。それです。現場にあっただけです。ユキの心臓に突き立っていただけです。僕が刺しました。僕が刺し殺したのです。

ええ、その通りです。僕は殺害後、包丁の柄にユキの指紋をつけました。保身ですね。僕は捕まりたくなかったのです。阿呆です。

殺した理由は、下らないことです。僕はユキのことが鬱陶しかったのです。僕は彼女に愛なんて求めちゃいなかったのに。鬱陶しければ、存在を消しましょう、そういうことです。今なら分かります。屑です。そうです。僕は阿呆な上に屑です。今、それがよく分かります。僕こそが死ぬべき存在だったのです。人を殺してのうのうと生き続ける、下種野郎です。殺してください。殺されたいですよ、もう。死刑にしてください。御願いだから、死刑にしてください。贖罪なんて出来ないけど、せめて殺してください。

犯人の自供・3

あたしがユキを殺した。うん。そうね。ユキを殺したのは、あたし。全部話す。だって、あたしは殺したんだから、ユキを。そう。あたしが一人で。

刃物を使った。そう、それね。遺留品のその刃物。ユキのアバラの辺りに刺さっていたそれ。あたしが刺したの。あたしが刺して殺したの。

うん、そうそう。刺殺した後で、刃物にユキの指をくつつけて指紋をつけた。気休めね。そんなのすぐばれるに決まってるに。馬鹿だよ。

動機は、単純なこと。あたしはユキが憎らしかった。私は彼が好きだった。で、ユキは彼に愛されているのに、彼には無関心で、何考えてんだか分かんないような暗いやつにご執心。憎いから殺した。腐ってるよね。うん。あたしは馬鹿が腐敗したような存在なんだ。分かってる。あたしなんて、死ねば良いのに。嫉妬に狂った人殺し。ああ、もううんざり。殺して。ねえ、拳銃、持ってたでしょ、殺してよ。もう、うんざりなの。殺して。殺してよ。あたしを撃ち殺してよ！

刑事達の懊悩・1

「まったく、どうなってやがる。どいつが本当の犯人なんだ……」

「ええ、わけが分かりません……」

「奴ら、お互いに庇いあっているのか？」

「そうかもしれませんが、そうでないかもしれませんね」

「そりゃそうだ」

「彼らの証言を、こうして文章に起こして改めて読んでみると、こいつらは多重人格で、それぞれの人格が自供しているのだ、みたいに思っちゃったりしますよ」

「なるほど。多重人格才チってやつだ」

「まあ、陳腐ですけどね」

「そんな話はいい。嘘をついているのは、誰と誰なんだ」

「あるいは……、三人とも嘘つき……とか」

「勘弁してもらいたいな。犯人はさっさと名乗り出ろ、と」

「いや、名乗り出ては、いるじゃないですか。三人も。むしろ名乗り出てるからこそ問題なんであって」

「そうだったな」

「……警部！被害者の物と思われる、手記が発見されました！」

「何？どこにそんなものが。自宅は隈なく調べたはずだ」

「郵便局です。切手も、あて先も、差出人も書いていない封筒が、届いていたようなのです。局員が中身を確認したところ、不審な内容の文章が書かれており、念のため警察に届けたそうです。筆跡が一致しました」

「どんな内容だ？」

「はい、ここに写しが」

ユキの手記

「ごめんなさい。すみません。許してください。どうか。

申し訳ありません。私はもう駄目です。駄目なのです。残念です。

生きていくのが嫌になりました。もう、限界なのです。

私は死ぬことにしました。自殺することにした。

どうか、勘弁してください。私はもうどうしようもありません。

助けは幾度も求めました。が、誰も気付いてはくれませんでした。

甘えです。甘えなのです。私は周囲に甘えていたのです。

これを書き終わったら、私は死にます。

胸を貫いて、自決します。あと、何文字の命でしょうか。

不思議です。恐怖はありません。寧ろ清々しいです。

死に至る生に、未練はもうありません。

詰まるところ、私一人が霧散したところで、

地球は回り続ける。

馬鹿みたいに。

クルクル。クルクル。

狂狂。

刑事達の懊悩・2

「なんじゃこりゃ！」

「怒鳴らないで下さいよ。オレのせいじゃないです！」

「ちくしょう。どいつもこいつも、馬鹿にしゃがって！ 死んだ奴にさえ馬鹿にされなきゃならないのか！」

「ところで警部、あのう」

「……なによ？」

「この前の、多重人格才チの話ですけどお」

「あ？ 何の話だ？」

「話したじゃないですか。被害者三人は実は、一人の人間のなかの分離した人格である、みたいな冗談話」

「そういや、そんな話もしたか」

「あれって、実はマジにそうなんじゃないですかね」

「ああん？ 何言ってんだお前」

「実は、彼らは、この被害者のユキという奴の、別人格なんじゃ」

「大丈夫か？ お前。疲れて頭に変なもの湧いてるのか？」

「かもしれませんけど」

「しょうがねえなあ。良いか？ 俺たちは、奴らが別々の存在であることを知っているんだ。それを前提に考えろ」

「第三者である僕たちが介入しているから、彼らは別々の確固たる存在である、と」

「面倒くさい言い回しだが、その通り。俺達が観測している限り、奴らは奴らだけの輪で完結させることは出来ない。そんな形で輪が閉じないことを俺達は知っているからだ。俺たちは、奴らが各々独立した人間であることを、知っているからだ。まったく、俺はお前のカウンセラーじゃねえつつうの」

「警部」

「なんだよ」

「その、オレが……」

オレがユキを殺したんです。すみません、警部。騙っていて。ユキを殺したにはオレです。全部吐きます。だってオレは殺したんですから、ユキを。そうです。オレだけで。

現場の遺留品の、あれを使いました。ナイフだか、包丁だか、刃物だか、はは、同じですよ。ユキの胸を貫いた、あれです。オレが刺しました。オレが殺りました。

そう。やったあとで、柄をユキの手で掴ませて、指紋をつけました。刺したときは柄に、タオルを巻いてあったし、ユキの手も血で汚れてはいなかったの、指紋に血が混じることもありませんでした。偽装工作です。まあ、あの程度の工作で本格的に欺けるとは思ってません。時間稼ぎのつもりでした。警察としても、自殺で片付けたほうが簡単でしょうから、そういう思いやりもありました。

動機は、特にありません。いや、一度人を殺してみたかった、というやつでしょうか。オレも警部も職業柄、殺人者と話す機会がありますよね。ありていに言うと、ま、魅了されたんですよ。恍惚として殺害のプロセスを話す、異常者なんかを見ていると、ああオレもやってみたい、って。っふふ。ははは。馬鹿馬鹿しい。意外と、面白くもなんともないですね、人殺しなんて。五月蠅いだけ。オレ、べつにサディストじゃあないですから、相手が泣き叫んだところで、別に嬉しかあないですし。

そうですね！ オレは最低で最悪で阿呆で屑で馬鹿が腐ったような奴ですよ！ そこまで落ちたのならば、寧ろ最高と言えるじゃないですか！ あははははははははは！

自供したあいつらですか？ オレが洗脳した、とか言ったら、警

部は信じますか？ ユキの手記も、オレの天才的な技術で筆跡を装ったとしたら？ 警部は信じますか？

信じませんよね！ 信じるはずないですよ！ それが正解です。そんなのは事実じゃありませんから！ ふっふはははは！

警部、貴方はどうする！？ どう解釈する！？ どうやって輪を閉じる！？ これは挑戦です。

刑事の霧散と警部の孤独とその解消

そう叫ぶと、刑事はスーツの内側から拳銃を取り出し、右のこめかみに当てた。

「さあ！ 貴方はどうする！？」

パン。

左のこめかみから血煙が上がった。霧状に散ってゆく。崩れ落ちる刑事。

そして、公園の水道みたいな勢いで流れ出す、どす黒いそれが床に広がる。

やたら粘性が高い。アメーバみてえだ、と警部は思った。アメーバをよく知りもしないで。

「ふん。下らない。分かったよ。分かったっての！」警部は叫んだ。そして、床から、まだ細く煙の上がつている拳銃を拾い上げると、一発撃った。白い壁に亀裂が走る。特に意味はない。「ああ、輪を閉じりゃあ良いんだろ！」もう一発撃った。撃った。撃った。景気付けのクラッカー代わりだ。

「ユキを殺したのは俺だ。そうなんだろう。くそつ。ユキを殺したのは俺だ。

全部白状しようじゃないか。だって俺は殺したんだからな、ユキを。

そうだ。単独犯だ。凶器はもう説明はいらんだろう。あれだよ。あれだ。

俺が刺して俺が殺して俺が偽装した。そうなんだろう。きっとそうなんだろう。

動機なんか知るか。動機なんて本当のところ、ありやしないんだろう。

ユキが殺されたという事実がまずそこにあって、その後付として俺が犯人であると。

残念ながら、そういうことらしい。道化だ。俺は道化だ。こんな形で輪を閉じるなんてな。

第三者のつもりだったのに、当事者だったとな。

俺は輪の外にいたつもりなのに、俺も実は輪の中にいたとはな。

皮肉なもんだな。

だってそうだろう？

俺がユキを殺した犯人で、そして俺が殺されたユキで、そして自

殺したユキでもあつて、つまるところそれが俺だ。みんなユキだ。あいつもあいつもあいつもこいつも、みんなユキなんだろう。

はは。うはは。私も僕もあたしもオレも俺も、みんなユキなんだ。はいそうです。

私は多重人格なのですな。

僕は気付いた。

あたしだって気付いたよ。

オレなんか俺にそれを気付かせてやった。

さあ、これで輪は閉じたはずだ！」

そして銃声。

血煙。

静寂。

虚無。

それでも地球は回る。それでも世界は世界だ。

夢見た後で

ユキを殺したのは、実は私です。

あの刑事も警部も、疲労と心労が溜まって、壊れてしまったのでしょう。可愛そうに。それも全て私のせいです。

ユキは死にたがっていました。遺書を書いていたのを知っています。

私はユキの自殺を手伝ったのです。一人で死ぬなんて、寂しいじゃないですか。

私は勿論、自首するつもりでしたよ。だから、こうして話しています。

あの三人ですか？ ええ、彼らは無罪です。私が頼んだのです。お金を渡して。お金を渡したら、やっぱり問題ですかね。あ、それよりも、捜査を攪乱したことが罪になるのですね。ああ、じゃあお金なんて渡してません。私が、そうしないと家族を皆殺しにするぞと脅しつけたのです。そういうことにしておいてください。

何故、カモフラージュする必要があったのか。それはですね、サキ、えっとユキの妹ですが、あご存知でしたか、彼女の10歳の誕生日までは、家にいてやりたかったからです。

サキの誕生日を、祝ってやりたかったのです。それだけです。父親として。

ええ。ユキを失ったのは悲しいです。大切な娘です。サキまでもいなくなったら、たぶん生きていけないでしょう。

それでも、私はもしサキが心から自殺を望んだら、その時は手を貸すつもりです。

生まれてきたものには、死ぬ権利があります。父親として、手伝う義務があります。

そうでしょう、刑事さん。

分かっただけませんでしたか。

残念です。

ところで、

私と貴方も含めて、ユキの別人格である。

そういう輪の閉じ方は、有り得ますかね。

その考え方を貴方は否定できますかね。主観なんて結構、脆いものなのですけどね。だからこそ、あの刑事達は壊れたわけじゃないですか。

ねえ。

貴方は何を基準に自分を確固たる位置にしているのです？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0360f/>

禍害妄想

2011年9月6日18時19分発行